

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：13201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21652034

研究課題名（和文） 中国古典文学における異文化イメージの形成

研究課題名（英文） The formation of different-cultural image in classical Chinese literature

研究代表者

大野 圭介 (ONO KEISUKE)

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号：30293278

研究成果の概要（和文）：

中国先秦時代において、北方の黄河流域（中原）とは異なる独自の文化を持った南方の楚国に開花した『楚辞』文学や、これと類似する形式をもつ「楚歌」は、後世に中国の内なる異景としての南方へのエキゾチシズムをかき立てる詩歌形式となった。そうした中国のエキゾチシズムが生まれた淵源とその変容の過程を、『楚辞』を始め諸書に残る詩歌や、『山海経』とそれに続く空想的地理書を題材に精査した結果、『楚辞』自体がエキゾチシズムの産物なのではなく、秦漢統一王朝の出現や、漢代における辞賦文学や神仙思想の流行が、『楚辞』文学の「異景」への覚醒を促す要因となったことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

During pre-Qin destination in China, *Chuci* 楚辞 literature and "Chu-ge 楚歌" which format similar to *Chuci* prospered in Chu 楚 to the south with its own unique culture that is different from the Yellow River basin of the north (Zhongyuan 中原). In posterity, it became a form of poetry that stirred the exoticism of the south as the "unusual scenery in China". Exploring *Shanhaijing* 山海経, subsequent imaginary geography, poetry remained in *Chuci* and other classics helps to explain the origin of the exoticism in Chinese classical literature and its process of transformation. In conclusion, *Chuci* itself was not really born by exoticism. The awakening to the "unusual scenery" in *Chuci* literature was caused by the prevalence of *cifu* 辞賦 literature and immortal thought as a result of advent of Qin-Han unified kingdom.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	0	500,000
2010年度	500,000	0	500,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,300,000	90,000	1,390,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：エキゾチシズム 中国文学 先秦 古代 戦国期 楚辞 異文化 山海経

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

- (1) 中国文学においてエキゾチシズムが強く現れた文学ジャンルは、六朝期以後の山水詩と、唐代の辺塞詩が代表的である。前者については小尾郊一『謝靈運 孤独の山水詩人』（汲古書院, 1983）、後者については森野繁夫『岑参の辺塞詩』（溪水社, 1988）など多くの研究があり、近年では中唐以後の辺地に左遷された詩人の文学についても、エキゾチシズムを主軸に据えた研究が現れている。しかしこれらの諸研究はまだ散発的なものであり、こうした作品群に現れた異文化イメージについての体系的な研究は十分には進んでおらず、その淵源がどこにあるのかを探る試みもほとんど行われていなかった。
- (2) 本研究代表者の大野は、2004年10月に発表した論文「蒼梧考」（『中国文学報』第68冊, 1~34頁）で、『楚辞』や『山海経』などに見える、楚地の南端にあった山の名である蒼梧が、六朝期から唐代にかけて、詩における「歌枕」へ転化した過程を考察した。伝説上の聖王・舜が葬られたと伝えられる、楚の聖地であった蒼梧は、漢王朝の成立とともに神話的なモチーフとして辞賦に用いられるようになり、六朝期には南方のエキゾチックな雰囲気醸し出す「歌枕」として用いられるようになったのである。
- (3) 「蒼梧」という一つの地名のみに限定したこの研究を、エキゾチシズムそのものの形成についての研究へと発展させれば、中国の古典詩歌における「歌枕」の用法や、それらに歌われる辺境の珍しい風土のイメージを解明するのに、別の角度からの新たな視点を提供することにもつながるのではないか。本研究はこのような意図から企画したものであり、中国古代における辺遠のイメージの神話学的意義、華夷観念、『楚辞』文学など、これまで個別に研究が行われてきた分野に、一本の縦糸を通そうとするものである点に特色がある。
- (4) さらに辺遠や異物への蔑視が憧憬へと転化する過程を解明することは、辞賦や志怪小説、ひいては辺塞詩のような文学を生み出した人々の心性を理解し、その読み方に新たな視点を提供する糸口となることも期待でき、その意義は大きいといえる。

2. 研究の目的

(1) 研究目的の概要

本研究は中国古典文学に現れた異文化イメージについて、その特質を解明するとともに、それらを生み出した人々の心性を正確に把握しようとするものである。具体的には、これまで作品別に散発的にしか行われてこなかった、先秦兩漢文学における異文化イメージの研究を、伝世資料のみならず近年発見の相次ぐ出土資料も考慮に入れながら、総合的な視野から行うことによって、中国文学におけるエキゾチシズムの淵源を解明することを目的とする。

(2) 研究期間内に何をどこまで明らかにするか

前節で述べた目的を達成するため、以下の課題を研究期間中の目標とする。

- ① 「中国の内なる異景」としての楚のイメージがいかんして形成されてきたかを、『楚辞』『山海経』『淮南子』など楚文化を反映しているとされる伝世文献や出土資料と、漢賦や漢魏六朝期の詩歌との対比から探る。
- ② 『楚辞』に代表される「楚歌」形式の詩歌が、六朝期以後南方エキゾチシズムを象徴する詩歌形式となっていく過程を解明する。

3. 研究の方法

- (1) 『楚辞』、とりわけ「離騷」や「九章」諸篇において特徴的な題材である「忠言を容れられぬ主人公の彷徨」の特質を、近年楚地から陸続と出土している資料も考慮に入れながら探ることにより、これが中原から見た楚のイメージにどう影響したかの足がかりをつかむ。
- (2) 先秦期の史書や思想書に多く引用される「歌」「詩」、特に『楚辞』諸篇でも顕彰されている伯夷や介子推が歌ったとされる「採薇歌」（『史記』伯夷列伝）・「龍蛇歌」（『呂氏春秋』等）の内容や形式に注目し、これらと『楚辞』諸篇との関連を探ることにより、いわゆる「楚歌」がどのように形成されてきたのかを解明する。
- (3) 地理書的内容を持つ伝漢代作の小説『神異経』『海内十洲記』を精査することにより、

戦国期の空想的地理書『山海経』から、仙話色が強く文体が著しく異なる両者へ、さらにその後の六朝志怪小説へどのような過程を経て変容したかを解明する

- (4) 以上の過程により、中国の「内なる異文化」である楚の詩歌がどのように形成されたか、それが中原の詩歌や文化とどう影響し合ったかを解明し、南方エキゾチシズムの淵源がどこにあるのかを解明する道筋をつける。

4. 研究成果

- (1) 『楚辞』において特徴的な題材である「忠言を容れられぬ主人公の彷徨」のについて、「九章」諸篇の「哀郢」「涉江」に見られる楚国南方への彷徨も、必ずしも主人公屈原の現実の姿を全面的に反映しているわけではなく、「離騷」に見られる神話的世界の高みへ昇っていく彷徨とちょうど表裏一体の関係にあって、楚国の末期的混乱によって神話的遊行でさえも救われない賢臣の姿を反映していることを明らかにし、口頭発表及び論文として発表した(学会発表①、雑誌論文①参照)。
- (2) 『楚辞』は一般に先秦期の中国文明の中心地とされた黄河流域(中原)とは異なる南方の文化に根ざしたものと理解されてきたが、『楚辞』作品自体で南方の風土や風物を自覚的に強調する描写は「橘頌」を除いてほとんど見られない。しかし『楚辞』諸作品では中原の帝王や名臣に盛んに言及しており、諸国が覇を競い合った戦国期において、自国の正統性や優位性は風土ではなく歴史観において主張されていたこと、さらに漢という統一王朝が成立してはじめて楚の風土が異国情緒をもって理解され、漢代に『楚辞』を模倣して作られた後期楚辞作品で楚の風土をたたえる表現が現れることを明らかにし、口頭発表及び論文として発表した。(学会発表④、雑誌論文④参照)。
- (3) 諸書に引用されて残っている、先秦期の「歌」とされる作品の中には、『史記』に引用された伯夷の歌のように、中原の人物の歌でありながら『楚辞』と形式が近いだけでなく、内容も君主に容れられぬ忠臣が己の節操に殉ずるという共通点が見られるものがあり、中原の歌と南方の『楚辞』との距離は従来思われていたほど遠くはないことを明らかにし、口頭発表及び論文として発表した(学会発表②、雑誌論文②参照)。
- (4) 地理書の内容を持つ伝漢代作の小説『海内十洲記』は、戦国期の空想的地理書『山

海経』と同様に辺遠の神話的世界が描かれるが、その文体はむしろ漢代の辞賦と『漢武帝内伝』などの仙話的長編小説の間に位置する過渡的なものであることを解明し、口頭発表及び論文に発表した(学会発表③、雑誌論文③参照)。

- (5) 以上の4点の成果から、中国古典における南方エキゾチシズムの淵源は『楚辞』自体が本来具えていたものではなく、秦漢統一王朝の出現と、漢代以降の辞賦文学や神仙思想の流行とが『楚辞』にエキゾチシズムを見出す要因になったのではないかという見通しが得られた。
- (6) 上記(4)の研究過程において、『山海経』の時代には巫祝との関連が強くなるかがえる空想的地理情報が、『海内十洲記』『漢武帝内伝』においては道教とのかかわりをうかがわせるものとなっており、空想的地理情報の担い手が巫祝から道士へと移り変わったことが仙話的長編小説や六朝志怪の成立に大きく関係している可能性に気づくに至った。このテーマは中国古典文学におけるエキゾチシズムというテーマにおいて、今後考究に値する課題である。

- (7) 当初予定していたものとはいささか異なる方向になったとはいえ、エキゾチシズムの端緒としての漢代の文学のさらなる解明や、中国国内の異景を盛んに描いている六朝志怪の形成過程解明に向けて道筋がつけられたことで、挑戦的萌芽研究としての本研究の意義は十分に達成されたといえよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

- ①大野圭介、『楚辞』九章諸篇における主人公の彷徨、富山大学人文学部紀要、査読無。第53号、2010、291-310
<http://hdl.handle.net/10110/3170>
- ②大野圭介、“詩”与“歌”——論《詩經》与先秦古籍所引之詩歌、詩經研究叢刊、査読有、第21輯、2011。165-181
- ③大野圭介、『海内十洲記』の文体について、桃の会論集、査読有、5集、5-37
- ④大野圭介、『楚辞』における「南国」意識、富山大学人文学部紀要、査読無。第56号、2012、395-418
<http://hdl.handle.net/10110/6830>

[学会発表] (計4件)

- ①大野圭介、論《九章》諸篇主人公の彷徨、楚辞学国際学術研討会暨中国屈原学会第十三届年会、2009年10月30日、深圳大学(中国広東省深圳市)
- ②大野圭介、“詩”与“歌”——論《詩經》与先秦古籍所引之詩歌、第9届詩經国際学術研討会、2010年8月1日、新時代大飯店(中国河北省石家莊市)
- ③大野圭介、神異経と海内十洲記、「桃の会」例会、2010年9月26日、同志社大学(京都市)
- ④大野圭介、《楚辞》的“南国”意識、2011年楚辞国際学術研討会暨中国屈原学会第14届年会、2011年6月5日、金沙大酒店(中国福建省東山県)

[その他]

- ①研究プロジェクト紹介ホームページ

<http://www.luman.saloon.jp/wiki/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大野 圭介 (ONO KEISUKE)
富山大学・人文学部・准教授
研究者番号：30293278